

掘り始めると、スコップの先がカチッと何かに当たる音がしました。

それはベルトの部分のようだったが、掘り続けると麦藁帽子の縁が出てきたので、これは頭の方だから手掘りにしよう、と手で掘り返しました。

すると臍が見えてきた。

麦藁帽子の縁が見えたのだから頭だと思っていたら、爆風で帽子の縁が腹のあたりにまで落ちてくっつき、それで仰向けの状態で臍が見えたのだろう。

祖父は口元の端に少し傷があっただけで、五体に傷はありませんでした。

祖父の死について、そこまでは覚えています。

スコップで少し掘ると、カチッと音がしたというから、祖父は全身に30センチほどの土を被っていたのだろう。

祖父の倒れていたのは、爆弾が落ちた穴の縁から5メートルほど離れたところ。

爆弾が落ちたときに私が入っていた防空壕は、その地点からは300メートルくらいで、私は、その時の爆風でしばらくの間、耳の鼓膜がおかしく感じたくらいだから、よほど強烈だったのだ、と思います。

その時の様子は母の手記に詳しく記され、今それを読み返しても涙が出てきます。

祖父の遺体を家まで連れ戻すことになって、戸板を取りに帰ったとき、私は祖父の枕を持って行きました。

しかし、戸板に寝かせた遺体に枕をあてがうことができなかつたので、私は後から枕を抱いて帰りました。

祖父は体が大きく頑丈な人でした。

葬式のときは、孫の私に重みがかからないように棺を担わせてもらい、墓地の焼き場まで行きました。

祖父の頭の皿は、爆風のためか黒くなっていたのを思い出します。

それにしても、すぐ際に京阪電車があり、その向こうに中木田の変電所があったので、それを目印に爆弾を投下したのではないか、と思ったりもします。

ちょうど京阪電車は空襲警報発令中で停止し、乗客は退避中でした。

なぜ、祖父一人が牛といた田んぼに爆弾を落としたのか、今もわかりません。

それからというもの、牛は逃げて帰って来た道を通って田んぼへ連れて行こうとしても絶対に行きませんでした。

嫌がって動こうとしないので、京阪電車の萱島駅の方から西側に回り道をし、牛を騙して田んぼへ行ったそうです。